

# アメリカ絵本史における リトル・ゴールドエン・ブックス出版の意味

—「安曇野ちひろ美術館」の絵本歴史コーナーから発展して—

石原敏子

1977年、東京都練馬区のいわさきちひろの自宅兼アトリエに開館された「いわさきちひろ絵本美術館（現「ちひろ美術館・東京」）は、絵本の芸術性を認め、絵本原画や絵本作家の作品・資料の収集・保護・展示・研究を目的とする絵本ミュージアムで、その誕生は、日本および世界において、絵本を「人類の大切な文化遺産」<sup>1)</sup>とする絵本文化研究の幕開けであったとすることができる。この施設の開設は、ちひろさんのご子息である松本猛氏の構想によるもので、その後、収蔵対象をちひろ作品に限らず、国内・海外で現代活躍中の絵本作家へと拡大し、1997年「安曇野ちひろ美術館」の開館へと発展していった。

今日、絵本がこどものみならずおとなやお年寄りに必要なものとして認められ、絵本に対する関心が高まる中、各地にそれぞれに特徴を持つ絵本ミュージアムが点在し、また、既存の美術館やデパートでも絵本原画展が盛んに開催されている。筆者は、2008年度国内研究員として、延べ60か所の絵本ミュージアムやこども文化に関する施設や特別展を訪問・観覧した。その中でも、東京・安曇野のちひろ美術館には一番多く訪れた。

「安曇野ちひろ美術館」では、いわさきちひろの作品の展示とともに、美術館所蔵の現代世界絵本作家の作品がテーマをもって周期的に展示される。季節に合わせた、また、興味深いテーマ設定で、学芸員の熱意と努力が窺える。さらに、この美術館でもう一つ関心を引かれるのは、絵本の歴史をたどるコーナーである。松本猛氏の「絵本は、美術史の本流にある」(92)という信念に基づいて、紀元前16世紀の『死者の書』から、海外および日本の手書きの写本の時代、版本の時代を経て、今日の絵本を形作った19世紀後半から1945年以前を概観する作品や資料が展示されている。絵本の歴史を知ること

は、現代における絵本の意味—文字言語と視覚言語の融合により、年齢を超えて情操に訴えかけるメディアとして果たすべき役割とその可能性—を考える上で、とても重要である。

「安曇野ちひろ美術館」の展示が扱う最後の時代、1945年頃のアメリカ合衆国の絵本について、アメリカの絵本研究家バーバラ・ベイダー(Barbara Bader)、および、レナード・マーカス(Leonard S. Marcus)の研究を頼りに、手元にある絵本を用いながら、少し深く探ってみることにしよう。

アメリカ独自の絵本の黄金期は、ヨーロッパからアメリカに渡った移民や、そうした先祖を持つ絵本作家が台頭してきた20~30年代である。ピーターシャム夫妻(Maud & Miska Petersham)や、ドーレア夫妻(Ingri & Edger d'Aulaire)、ワンダ・ガアグ(Wanda Gág)などといった作家たちが、それぞれ、ハンガリー、ノルウェー、ボヘミアの文化を受け継ぎながら、新しい土地で自分たち独自の表現を作り上げていく過程で、面白い作品を作り、そのエネルギーがアメリカ絵本創造の原動力となった。

しかしながら、優れた絵本が生み出される一方で、30年代後期にいたるまで、アメリカの絵本は、一冊が1.5~2ドルの高価なギフトブックであり、丁寧に扱われるべきものであった<sup>2)</sup>。はたして、そうした絵本が本当にこどもの楽しみになりえたかと言えば、おそらくそうではなかったであろう。お風呂に持って入って叱られたこどものエピソードも残っている<sup>3)</sup>。そうした状況において、絵本本来の目的である、こどもが自由に読んで楽しめるものが必要という考えに基づいて、1942年、サイモン・アンド・シュスター社(Simon and Schuster)から、一冊25セントで、分厚いボール紙を表紙にした、色鮮やかな絵本が12タイトル出版されることになった。その後も、出版社や編集方針の変更など

を経ながら、今日までその人気を保つリトル・ゴールデン・ブックス (Little Golden Books) シリーズの誕生である。このシリーズは、アメリカの絵本および子ども文化の歴史を考える上で、忘れてはならないものである。その理由は、上述したように、一般家庭でも購入できる廉価本であったこと、それでいて、ストーリーや絵は一流の作者、およびイラストレーターにより作られ、その質が保障されていたこと、カラフルで生き生きした絵本作りを可能にする優れた印刷技術があったこと、そして、特に大きな要因であったのは、一般の書店のみでなく、デパートやスーパーマーケットで売られることで、母親たちが子ども連れの買い物のついでに購入できたことなどである。こうして、それまでは一部の家庭のこどものものでしかなかった絵本が、一般に流布することになった。売り出されて5か月の内に12タイトルが三度増刷され、合計で1,500,000冊を記録したとの『パブリッシャーズ・ウィークリー』(Publisher's Weekly)の記事が残っているとのことである<sup>4)</sup>。

最初の12冊は、マザー・グースや、民話、お祈りを題材としており、他には、アルファベットや数の数え方を教えるものもあった(図1)。親しみやすい絵と簡潔なテキストで、おとなが子ども(特に就学以前の子ども)に読んでかせるのに適しており、出版後直ちに人気を博することとなった。第二次世界大戦のさなか、おもちゃ製造どころではない時代において、親子ともに夢のあふれる想像の世界へ入っていくことを可能にする、それも廉価で手に入れることのできるこれらの絵本が、一般家庭における娯楽となったことは指摘を待つまでもない。



図1



図2

12冊の中で、今日まで大人気作品を挙げておこう。ジャネット・セブリング・ロウリー (Janette Sebring Lowrey) 作、グスタフ・テングレン (Gustaf Tenggren) 絵の *The Poky Little Puppy* である(図2)。いたずらの罰として兄弟はおやつをもらえなかったのに対し、好奇心旺盛で一人で冒険していた一番下の子犬は、帰りが遅くその場に居合わせなかったため、罰も無くおやつをもらう。このパターンが三回繰り返され、最後は立場が逆転し、子犬がおしおきを受けるといのお話である。明快なストーリー展開、子犬の天真爛漫さ、こどもの普段の生活にもよくあるような経験の共有、そして、なんと言っても鮮やかな色使いで描かれた子犬の愛らしさに、このストーリーの人気の秘密がある。リトル・ゴールデン・ブックスの最初の12冊に含まれている *Bedtime Stories* もテングレンのイラストである。テングレンは、スイス生まれのイラストレーターで、初期はヨーロッパのおとぎばなしの伝統を継ぐスタイルの絵を得意としていたが、後にアメリカ合衆国に移住し、ディズニープロダクションにおいて『白雪姫』などの制作に関わり新しい作風を確立した。その後、ゴールデン・ブックスに参加することになり、ディズニーでの経験を生かして、こどもの心を捉える生命力あふれる絵を描くと同時に、『アラビアンナイト物語』(Tenggren's *Golden Tales from the Arabian Nights*, 1957)(図3) や、『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer*, 1961) などでは、シックでフォーマルでありながらも流れるような躍動感を持つ美しいイメージを駆使した絵本を制作した。



図3

リトル・ゴールデン・ブックスの形態は、1942年の出版当時から変化することなく今日まで受け継がれている。17×20センチの大きさで、表紙は堅いボード紙、左端がテープ留めになっている<sup>5)</sup>。時代とともに、イラストが変わることもあるが、人気のタイトルは大半がオリジナルのままで出版され続けている。時に、特別版のような形で、大型版や、デラックス版（上記の『アラビアンナイト物語』など）、さらには、箱入りセットが売られることもあった。

図4は、ドロシー・クンハート（Dorothy

Kunhardt）作、ガース・ウィリアムズ（Garth Williams）絵による、それぞれ12冊の絵本のセット、*Tiny Animal Stories*（1948）と *Tiny Nonsense Stories*（1949）である。一冊の大きさは、5センチ強×8センチ弱、タイトルページを含めて18ページという小ぶりである。それぞれのセットにおいて、ミニ絵本12冊が、家をデザインしたボール紙の箱に収められており、その家の窓からは絵本に登場する動物たちが顔をのぞかせているところが描かれている。当時、全部で288ページのカラー版12冊セットが一箱で、なんと1ドルで売られていたということである<sup>6)</sup>。各絵本において、異なる一組の動物の親子に起こる出来事が描かれている。例えば、日向ぼっこで泥が固まってしまったサイの母子が父親に助けられるといったこと（*The Two Stuck-in-the-Mud Rhinoceroses*）や、エイプリル・フールに母子が父親にいたずらをしかける（*April Fool*）といった他愛のない事柄である。300語程度の短さながら、しっかりとした構成を持つお話になっている。また、本のデザインにも工夫が凝らされている（図5）。*Tiny Animal Stories*では、おもて表紙は窓（上記の箱に描かれた家の窓）から顔を出している動物を正面から、そして裏表紙はその後ろ姿を映し、*Tiny Nonsense Stories*では、おもて表紙のいたずらに夢中のこどもにはまるで無関心であるかのように、おめかしをしてでかける両



図4



図 5

親の姿が裏表紙に描かれている。こうしたユーモアたっぷりの表紙を見るだけでも、読者は楽しい気分させられる。このセットを自分のものにした子どもたち（あるいは、おとな）の得意で満足げな表情を想像することができよう。

こうして1940年代に始まったリトル・ゴールド・ブックスは、その後も様々な斬新な試みをしながら、こどもに優れたストーリーを提供し、彼らを芸術の世界へと導き、その好奇心を満たし、想像世界を豊かにし続けていく。20世紀後半および21世紀のアメリカの絵本読者を形成し、絵本市場を動かし、こども文化を作り上げてきた点において、このシリーズの重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。これからも、多くのこどもやおとなたちが、このシリーズを通して多くの優れた絵本に出逢い、豊かな読書時間を持つことだろう。

[注]

- 1) ちひろ美術館ホームページ「理念」より。「ちひろ美術館」および、絵本美術館については、松本(88-89)、『絵本の事典』を参照。
- 2) Marcus, 32.
- 3) Marcus, 29.
- 4) Bader, 277.
- 5) Bader, 279. Marcus, 59-66. ダスト・ジャケットの廃止、紺色からゴールド・テープへの変更、42から24ページへの減少といった改変はあった。
- 6) Bader, 294.

[引用文献]

Bader, Barbara. *American Picturebooks from Noah's*

*Ark to the Beast Within*. New York: Macmillan Publishing Co., Inc., 1976.

Dixon, Rachel Taft, illustrated. *Prayers for Children*. New York: Simon and Schuster, 1942.

Gale, Leah, illustrated by Vivienne Blake. *The Alphabet from A to Z*. New York: Simon and Schuster, 1942.

Kunhard, Dorothy, illustrated by Garth Williams. *Tiny Animal Stories*, New York, Simon and Schuster, 1949.

\_\_\_\_\_, illustrated by Garth Williams. *Tiny Nonsense Stories*. New York, Simon and Schuster, 1949.

Lowrey, Janette Sebring, illustrated by Gustaf Tenggren. *The Poky Little Puppy*. New York: Simon and Schuster, 1942. New York: Golden Books, 2007.

Marcus, Leonard S. *Golden Legacy: How Golden Books Won Children's Hearts, Changed Publishing Forever, and Became an American Icon Along the Way*. New York: Golden Books, 2007.

Tenggren, Gustaf, illustrated. *Bedtime Stories*. Western Publishing Co. Inc., 1942. New York: Golden Books, 1992.

\_\_\_\_\_, illustrated. *The Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer*, selected and adapted by A. Kent Hieatt and Constance Hieatt. New York: Golden Press, 1961.

\_\_\_\_\_, illustrated. *Tenggren's Golden Tales from the Arabian Nights*, retold by Margaret Soifer and Irwin Shapiro. New York: Simon and Schuster, 1957. New York: Golden Books, 2003.

『絵本の事典』中川素子他監修 朝倉書店 2011年。  
ちひろ美術館ホームページ <http://www.chihiro.jp/rinen/omoi/> (2013年1月10日閲覧)。  
松本猛『はくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ』講談社 2002年。

博物館運営委員 外国語学部教授